

一ふで申り。まづ／＼それさま御てら屋しきの事、ちくぜんさまへ申あげ候へば、まるらせられ候はんのよし、御申なされ候云々。

天正十八ねん八月十八日 ちよぼより

右は即ち利常卿生母壽福院君の親筆也。此の書翰にて見れば、名護屋に赴きし以前よりの裏方なる事知られけり。前田四代自記に云ふ。文祿二年四月十六日於金澤城出産。去年六月名護屋へ被遣、彼地にて懷妊に付、今春被令歸。女中名おちよぼの方、後壽福院殿、世に東丸様といふ。とあり。按ずるに、是其の實を得たれど、生誕の月日は誤也。

○本丸唐門

本丸附段より東丸への入口の假門を呼べり。寛永八年炎焼以前本丸に居館し給ふ頃は、唐門とて結構を盡したる門ありしかど八年の災に焼亡し、二丸に殿閣を造營ありて、二丸を本城となし給ふに依りて再造なかりしといへり。寛永四年の土帳に、御加羅門御番人として馬廻組の士數名を載せたり。是即ち唐門の直番人なり。關屋政春の古兵談及び可觀小説に、寛永八年四月十四日河原町より出火し、城

中へ火移り延焼の時、既に本丸に火懸りけるに依つて、利常卿御父子御同道にて退出し給ふ。于時本丸唐門石壇の處にて、御父子御辭儀有りて互に出で給はず。火は頻りに焼ける。御供衆息はづむ處に、今枝民部（註）、筑前様は御若くあられせらる。先づ殿様御出被遊やうにと申上ぐといへども、尙御辭儀なりしを、奥村河内守大殿御出可然とて、づんと立ち、御手を取りて引出しけるに、につこと御笑ひ退出し給ふと、佐々伊左衛門語る。とあり。右火災後は本丸は空地と成りたるにより、假門なりしかど、古名に依りて唐門と呼べり。金城深秘録に、唐御門は唐の門の建方なり。故に唐御門と云ふ。鐵御門は鐵の板金を以て柱等を包みたるに依りて名付く。といへり。或は曰く、唐門は所謂四足門也ともいへり。

○東丸

此の曲輪は本丸の東續きにて、蓮池堀の高を云ふ。蓋し公界向にては本丸の域内也。故に寶曆五年幕府國目附衆尋問の答書に、金澤城郭廻櫓數等書上の條に、東丸の櫓及び庫倉・門等を皆本丸の條に記載し、東丸の名目を載せず。是

等にて東丸は本丸の域内なる事知られけり。本丸にそのかみ居館し給ふ頃、殿閣より東方に當り、此の地に芳春院殿及び壽福院殿居館し給ふにより、東丸と呼び初めたるならんか。慶長二年に大覺寺宮空性法親王の調筆し給ふ白山比咩神社の掛額に、當社再興加賀大納言（註）豊富朝臣利家卿、同東御方爲子孫繁榮也と載せ給へる東御方は、即ち芳春夫人なり。小瀬太閤記に、慶長三年醍醐花見興の次第、五番加賀殿利家卿の息女、六番東の御方但利家卿女中。とありて、慶長十一年の白山奉賀帳には、米五石ひがしの丸御うへさま。と載せたり。さればそのかみ東丸に居給ふにより、東の御方とも、また東の丸上様とも呼び奉れるなるべし。又利常卿の生母壽福院殿も東の丸に居給へり。三壺記に、利家卿の北の方御近習に宮仕へ奉る女中おちよぼの方、金澤御城天守下の局にて若君御出生被成。利光卿の御代と成り、御母堂の事なれば、東の丸に屋形を建てさせられ、是に御座被成、東の丸様とぞ申しける。と見たり。有澤武貞の金澤細見圖譜に、芳春院君後は東の丸に御座被成、御逝去の後は壽福院殿東の丸に御座ありと云ひ、或は東の丸

に有之八枚戸・四枚戸と云ふものも、右御女中方遠方眺望の爲めなりと云ひ傳ふ。とあり。但し芳春院君の東丸に居給ふは、利家卿在世中なる事、彼の白山扁額等にていちじるし。さて利家卿薨後、慶長五年五月人質として江戸へ下向被成、同十九年六月金澤へ歸國なされしが、此の時二丸に屋形を御造營ありて、此の屋形に居給ふにより、二丸をばそのかみ芳春院丸と呼びたりとあれば、逝去の後壽福院殿東丸に御座ありと武貞が載せたるは、過聞なるべし。又八枚戸・四枚戸といふものは、金城深秘録に、辰巳御櫓續に四枚戸・八枚戸堀の内に有之、芳春院君御座被成節御覽の所と承り申す。とありて、東丸の太鼓塀に附けありしかど、廢藩の後太鼓塀を悉く破却せし故に今はなし。

○獅子土藏

大獅子・小獅子とて、各扉に獅子を彫り付けたり。故に獅子、御土藏と呼べり。三庫ありて、國初以來軍用の金庫とし、大銀奉行之を裁許す。依りて惣名を大がね土藏と呼べり。寶曆五年幕府國目付衆尋問の答書に、本丸土藏三所とある三庫にして、此の答書には東丸を皆本丸とせしなり。